

論文提出者氏名：文 景楠

論文題目：説明理論としての質料形相論

文景楠さんの博士学位請求論文「説明理論としての質料形相論」は、アリストテレスの質料形相論に対して、それを説明理論として捉えるという視座から一貫した解釈を与えたものである。質料形相論はアリストテレス哲学において中心的な位置を占める議論であるが、それをどう解釈するかについてはいまだに解釈上の論争が続いている。おおまかに言って、従来の解釈は質料形相論をアリストテレスの存在論の脈絡に位置づけ、「質料」および「形相」と呼ばれる存在者がいかなるものであるのかを巡って論争が闘わされてきた。そうした状況の中で、文さんは質料形相論を存在論の脈絡から切り離し、説明理論として捉える。すなわち、アリストテレスは「質料」や「形相」と呼ばれる存在者を考えていたのではなく、「質料 - 形相」によって説明を与えるための道具立てを与えていたのだと解釈するのである。

まず、この解釈の独自性を評価しておこう。かつて質料と形相をその一部として含む「アイディア」の概念に対して、それを「原因」としてよりも「説明」として捉えようという試みが為され、十分に展開されないままになっていた。文さんはその試みを全面的に引き受け、質料形相論をその観点から一貫して読み解こうとする。つまり、発想そのものは既存のものであるが、それを全面的に引き受けてこれほど一貫した解釈を提示したものは他にない。この点に本論文全体としての独自性があり、審査委員がこぞって高く評価した点もそこにある。

次に細部の評価を述べる。第1章は先行研究をまとめ、そこから問題を取り出し、本論文の課題を見定める。本章だけに限る評価ではないが、本論文全体を通して、先行研究の整理とそれを紹介・説明する論述はきわめて的確で明快である。

第2章では、説明理論という観点から質料概念を捉える。まず「自体的説明」と「付帯的説明」という区別の内実を論じ、そこで明らかにされた論点を用いて、質料概念を導入する契機ともなったエレア派の懐疑にアリストテレスがどのようにして対抗しようのかが示される。この議論は本論文独自のものであり、また、このような議論をアリストテレスから読み取る上で、独自の解釈が打ち出されている。しかも、その議論および解釈にはきわめて説得力があり、審査委員全員がそれを高く評価した。とりわけ審査委員の一人であるアリストテレス研究の専門家は本章を絶賛していた。

続いて、第2章で示された本論文の主張に対して、反論となりうる問題点を提示し、その問題を克服する過程で「説明理論として質料概念を捉える」という主張にさらなる肉付けを与える。第3章では「同名異義原理」と呼ばれるアリストテレスの主張を取り上げ、それに対して説明理論のもとで新たな解釈を与えるとともに、説明理論をいっそう豊かなものとして提示した。第4章では「質料と形相の分離不可能性」というアリストテレスの議論に対して、説明理論と整合的な解釈を与える。ここでもまた独自の解釈が提示され、質料を用いた説明が「質料と形相の分離不可能性」から一見

すると示唆されるように思われる柔軟性を欠いたものではなく、説明の修正を許す柔軟なものであることが示される。

後半では形相を説明理論のもとで捉える議論が為される。第5章ではアリストテレスの感覚論の鍵となる「形相の受容」を巡る論争を取り上げる。対立する三つの立場を示し、その一つの立場を説明理論という観点から擁護し、また、問題となっているアリストテレスのテキストにおける「難所」に対して説明理論という観点から新たな、そして一貫した解釈を与えた。第6章では、実際に生成変化を説明するさいに形相がどのように重要な役目を果たすかが論じられ、形相を説明理論の観点から捉えるという主張に内実が与えられる。ここでも、他の学説の紹介ではなく、文さんの独自の議論が展開される。第7章では、アリストテレスのテキスト中に見られる、いかなる対象とも関連しない仕方形相がそれ自体として与えられる場合があるかのような議論——もしその議論が見かけの通りであるならば説明理論として形相を捉えることが困難になる——に対して、説明理論の観点のもとで解釈を与える。

序論と結びで示されるが、こうした質料形相論は質料 - 形相の一例である「ソーマ - プシューケー」をどう捉えるかという問題に直結する。「ソーマ」を身体と捉え、「プシューケー」を心と捉えるならば、そこには現代の心身問題に通じる問題意識があったことになる。実際、アリストテレスに現代的な心身問題とそれへの応答を読みとろうとする研究が一時期盛んになり、いまではその試みは失敗であったことが大方の研究者間での共通理解になっているが、その失敗の理由が何であり、どう立て直せばよいのかは明確になりえていない。その状況の中で文さんは、その失敗の原因を「ソーマ - プシューケー」を含む質料 - 形相概念が正確に捉えられていないことに見て、本論文の質料形相論を開いたのである。そして本論は、質料 - 形相を実体的に捉えるのではなく、説明理論を構成するものとして捉え直した。その結果、「ソーマ」や「プシューケー」もまた、実体的に「身体」と「心」として捉えられるのではなく、生命や心的現象を説明するための枠組を成すものとして捉えられることになる。

以上のように、本論文全体を通じて独自の議論、独自のアリストテレス解釈が盛り込まれている。しかも、それがきわめて慎重で緻密な議論とテキスト解釈に裏打ちされた仕方で、かつ一貫した構想の下に展開されている。その力量と、本論文における成果に、アリストテレスの専門家二人とトマスの専門家一人を含む五人の審査委員全員が賛辞を惜しまなかった。本論文から、国際的な学会に発表しうる論文が何本も書かれうると思われる。

もちろん論争的な性格をもつため、審査会では反論も出された。しかし、それは本論文の傷になるようなものではない。哲学論文の場合には、生産的な反論を引き出すような論文こそ高く評価されるのであり、本論文もその例に漏れない。また、アリストテレス哲学という巨大な全体の中で本論文の議論がどう位置づけられるかがさらに問題になり、その点を巡っても議論の応酬があったが、それも本論文がこの論文だけで閉じたものではなく、さらなる研究へと繋がっていることの証にほかならない。

以上のような評価に基づき、本審査委員会は全員一致で文景楠さんの提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。